

地域情報（県別）

【大阪】診療エリアの住之江区・西成区で、初の地域医療支援病院に承認-福田隆・南大阪病院院長に聞く◆Vol.1

登録施設は194施設、紹介率は10%上昇して81.9%

2026年4月29日 (水)配信 m3.com地域版

住之江区および西成区の基幹病院として主に急性期医療を担っている南大阪病院（大阪市住之江区）は、2025年3月28日付で大阪府より地域医療支援病院に承認された。承認を目指した理由と要件を満たすために取り組んだこと、地域の医療機関との連携状況などについて、院長の福田隆氏に聞いた。（2026年3月13日オンラインインタビュー、計3回連載の1回目）

▼第2回はこちら

▼第3回はこちら

病院の理念を守るために、地域医療支援病院の承認を得る

——2025年3月末に地域医療支援病院に承認されました。この時点で承認を得たのには、どのような理由がありますか。

当院には75年の歴史があり、過去には700床の規模で病院運営を行っていたこともありましたが、2014年に病院を建て替えた後も28診療科で400床を有していることもあり、住之江区および西成区の地域において基幹病院としての役割を担ってきました。私は、2020年7月から8代目院長として病院運営の舵取りを行っています。

院長として頭を悩ませているのは、近年の急激な物価高と人件費の上昇で、急性期病院を取り巻く環境がとても厳しくなっていることです。この難局をどのように乗り越えていくか、その方向性を示すことが私の役割だと思っています。

そこで考えたことは、38歳の若さで当院を創立され初代院長を務められた内藤景岳先生の初志であり当院の理念でもある「地域からよろこばれ、信頼される病院をめざします」という運営方針を現代社会に適合するように進化させ、言葉に込められた思いを今後も守り続けることです。そして、その方策の一つが、地域医療支援病院の承認を得ることでした。



福田隆氏

——「病院の理念を守るために、地域医療支援病院の承認を得る」とのことですが、この意図を聞かせてください。

国は地域包括ケアシステムを打ち出し、地域完結型医療を実現するために医療機関の役割分担と機能分化を推進しています。また、少子高齢化が進み、将来的に労働人口が減少していく中では、医療の世界においても限られた医療資源をどのように有効活用していくかが、とても重要になると考えています。

このような状況がある中で当院は、「地域からよろこばれ、信頼される病院をめざします」という理念を開院以来大事にしてきたため、軽症から重症まで来院される全ての患者さんを断ることなく受け入れ、患者さんの希望に応えるために病状が安定した後も外来にて継続して診ていくことが文化になっていました。この文化は、当院の特徴であり、当院の良さでもありますが、一方で急変する社会状況と国の方針に適応しづらいというデメリットを生じさせていました。

内藤先生の初志と当院の理念に込められた思いは、地域に必要とされる病院になることです。現代社会において当院に求められている病院像とはどのようなものか、これまで行ってきた病院完結型医療でよいのか、これらを熟考し見えてきたことは、地域包括ケアシステムが目指す地域完結型医療において、当院が中心的な役割を担う病院となることでした。

そこで、当院の運営方針を時代に合わせて進化させ、急性期病院として、入院医療や救急医療、高度専門医療に注力すること、その上で地域の医療機関と連携しながら地域完結型医療を実践していくことを、病院の内外に対して明確に示すために、地域医療支援病院の承認を目指しました。



南大阪病院

地域完結型医療を実践し、地域住民と病院職員の意識を変革

——地域医療支援病院の承認を得るために、取り組まれたことを教えてください。

地域医療支援病院に承認されるための取り組みで最も苦労したことは、75年の歴史の中で醸成された地域のみなさんと当院職員の「意識」を変革することでした。

地域のみなさんの中には親子3代で当院を受診される方もいらっしゃるのですが、風邪や発熱、腹痛などの一般的な疾病であっても、「何かあれば、とりあえず南大阪病院」という意識、かかりつけの病院としての意識が根強く残っています。一方で、当院の職員には、長年続けてきた病院完結型医療の意識がしみ込んでいました。この両方の意識を変革し、地域完結型医療を実践させていく、そのための取り組みから始めました。

当院の職員に対する取り組みとしては、最初に院長の私と経営幹部とで直近に地域医療支援病院に承認された病院を見学し、地域医療支援病院に承認されるために実行された具体的対策を教えてくださいました。その上で2022年10月に、見学に行った病院の担当者に当院に来ていただき、地域医療支援病院の承認に向けてのキックオフイベントで講演をしていただきました。

その後は、院長の私が率先して、朝礼や医局会などで、当院がなぜ地域医療支援病院の承認を目指しているのか、承認されてどのような役割を担っていくのかを、事あるごとに話し続け、院内での関連セミナーも実施しました。そこで、急性期病院として紹介患者さんを中心に診療を行い、患者さんの病状が安定しリハビリにより在宅復帰が可能になれば地域の医療機関に逆紹介すること、地域完結型医療を実践することを意識づけていきました。

また、地域の開業医の先生方から患者さんを紹介いただきやすい環境づくりにも努めました。以前より登録医制度を設けていますが、地域医療部が中心となり当院医師が登録施設の訪問を重ね、登録医総会の場も利用して地域の先生方と顔が見える関係性を構築していきました。この動きと同時に、医師が紹介元の医療機関に返書を出しているかをチェックし催促するシステムや、適切な逆紹介状の作成をサポートするシステムを導入しました。

——患者の意識変革では、どのようなことを行いましたか。

患者さんに対しては、かかりつけ医の先生方の協力を得ながら、地域のみなさんが適切な医療を安心して効率よく受けられることを目指して地域完結型医療を行うことを丁寧に説明し、逆紹介へのご理解をお願いしました。紹介状がない場合は、選定療養費が必要になることもホームページなどを介して周知しました。

また、当院の登録医制度に登録していただいている医療機関のパンフレットを作成して病院内に設置し、外来で患者さんへの説明用に最寄りの医療機関のマップを提示するタブレットも準備しました。



総合案内

登録施設は194施設、紹介率は81.9%

——地域医療支援病院に承認されて約1年になりますが、地域の医療機関との連携状況を教えてください。

現在、当院の登録施設は194施設になり、紹介率と逆紹介率は、2024年度紹介率72.1%・逆紹介率54.3%だったが、2025年度は紹介率81.9%・逆紹介率57.4%となりました。逆紹介率の伸びが鈍いのは、当院を離れたくないと希望される患者さんが多くいらっしゃるというのが要因だと考えています。そういった患者さんに対して無理強いはできないので、逆紹介については徐々に上げていきたいと思っています。

地域医療支援病院の承認要件の一つには地域医療従事者に対する研修があり、年間12回以上の実施となっていますが、当院は地域医療支援病院に承認される以前から積極的に取り組んでいます。その理由は、昔から地域における基幹病院としての責務を自覚しているからです。現在は、医師だけでなく看護師や理学療法士などが、年間30回以上の研修会やセミナーを実施することで、地域の医療従事者の育成に貢献しています。

2025年の初めの時点では、大阪府内で50施設が地域医療支援病院に承認されていましたが、当院のある住之江区と隣接する西成区には地域医療支援病院がない状態でした。今回、この地域で最初の地域医療支援病院に承認された当院の役割として、地域の医療連携をさらに推進していきたいと考えています。

◆福田 隆（ふくだ・たかし）氏

1982年大阪市立大学（現：大阪公立大学）医学部卒業、医学部第3内科（現：消化器内科）入局、1988年同大学大学院医学研究科第3内科学博士課程修了、1989年同大学第3内科助手。1990～1991年米国カリフォルニア大学アーバイン校留学。1998年城東中央病院副院長、2006年同病院院長。2012年南大阪病院副院長、2020年同病院院長。日本消化器病学会専門医・指導医、日本消化器内視鏡学会専門医・指導医、日本消化管学会専門医・指導医、日本内科学会指導医、日本栄養治療学会認定医、日本抗加齢医学会専門医、日本医師会認定産業医。

【取材・文＝竹花繁徳】（写真は病院提供）

記事検索

ニュース・医療維新を検索

